

助産師教育における外国人妊産婦とのコミュニケーション演習

嶋澤 恭子¹, 宮下ルリ子¹, 平田 恭子¹, 奥山 葉子¹, 有本 梨花¹, 村松 紀子²

¹神戸市看護大学, ²医療通訳研究会 (MEDINT)

キーワード: 外国人妊産婦, コミュニケーション演習, 助産師教育

Communication exercise with foreign pregnant women in midwifery education

Kyoko SHIMAZAWA¹, Ruriko MIYASHITA¹, Kyoko HIRATA¹,
YOKO OKUYAMA¹, Rika ARIMOTO¹, Noriko MURAMATSU²

¹Kobe City College of Nursing, ²MEDINT

Key words: Foreign pregnant women, communication exercise, midwifery education

I. はじめに

我が国の外国人登録者数は223万人を超え、すでに総人口の1.75%を占めている。(法務省2016)。

外国人住民の定住化、国際結婚の増加に伴い、20歳代から30歳代の女性、いわゆる生産年齢人口の外国人女性が増えている。彼女らは、妊娠、出産、子育ての機会に、日本の医療機関や保健所などを利用し、医療者は臨床で彼女らに出会うことも日常となってきた。日本の周産期医療は世界でもトップレベルではあるが、それが必ずしも外国人妊産婦にとって十分だとは限らない。なぜなら妊娠、出産、育児周辺に関しては各国の文化的慣習が顕著に表れるが、医療サービスは十分対応できていない現状がある(李2015)。また外国人妊産婦の中には、日本の母子保健サービスが理解できていなかったり、地域コミュニティとつながってなかったりといった孤立するケースも少なくない(井上2006)。

一方、ICM(国際助産連盟)における基本的助産業務に必須な能力として、助産師の「文化的な能力」や

「質の高い文化的配慮のある助産ケアの提供」の習得が挙げられている(ICM 2010)。

今後ますます増加が見込まれる外国人女性に対して、助産師は、様々な場面で外国人妊産婦と接する機会が増えていくことが予測される。

上記のことも鑑み、筆者らはA大学の助産専攻科において「在日外国人の母子保健」をテーマに授業を行っている。そして、2012年より演習のゲストに外国人女性を招き「外国人妊産婦とのコミュニケーション演習」を導入している。今回は、演習の実際とその評価について報告する。

II. 演習の内容

A大学の助産学専攻科において、「助産とコミュニティ」という科目で演習を行っている。演習の目的は、「言語通訳が必要な対象への助産ケアの実際を学ぶ」とし、目標は、一つ目には「コミュニケーションの種類、方法について工夫することの必要性を理解できること」、二つ目には「通訳を用いたコミュニケーショ

表1 演習内容(例)

| 時間 | 内容 |
|-------|--|
| (30分) | 講義「外国人妊産婦の現状と背景について」 |
| (10分) | ゲスト紹介と演習内容説明 |
| (40分) | 2グループに分かれてゲスト模擬妊産婦に妊婦健診の問診 問診後にゲストの感想を聞く ミニ講義「やさしい日本語について」 |
| (10分) | 休憩 |
| (50分) | 通訳者を介しての4か月健診での問診 外国語(スペイン語)問診票を用いての3歳児健診での問診 |
| (40分) | ゲストと学生との意見交換 ゲスト模擬妊産婦の出産経験を聞く |
| 終了後 | 振り返りシートの記載 |

表2 問診の内容(抜粋)

| | |
|-------------|--|
| 共通質問 | 名前,年齢(生年月日),国籍,母語,出生地,住所,仕事 |
| 質問A | <ul style="list-style-type: none"> ・仕事の連絡先。どんな仕事ですか? ・妊娠第何週か?何週目まで仕事をするか? ・ジェノグラム(家系図)を書いてください。 ・健康保険の種類 ・出産育児一時金の直接払いを利用しますか? ・出産手当の申請をしますか?会社などの特別な手当の申請はありますか? ・保証人または何かあったとき(緊急な帝王切開や輸血など)に、決めてくれる人は誰ですか? ・出産で不安なことはなんですか? ・出産に立ち会ってほしい人は誰ですか?逆に立ち会ってほしくない人は誰ですか? |
| 質問B | <ul style="list-style-type: none"> ・在留資格は何ですか? ・妊娠第何週か?分娩予定日はいつですか? ・経産婦なら前のお産は帝王切開かどうか? ・今回のお産は帝王切開を希望するかどうか? ・妊娠中絶をしたことがあるか? ・アレルギーはありますか?何のアレルギーですか? ・宗教はなんですか?輸血をしてもいいですか? ・キーパーソンは誰ですか? ・出産時に望むことはなんですか? ・出産の対する思いを教えてください。 ・今の体調はいかがですか?気になることはありますか? |

ンについて学ぶことができること」としている。

毎回の演習には、ゲストボランティアとして、医療通訳者1名と日本語が十分話せないポルトガル語・スペイン語を母語とする模擬妊産婦役の外国人女性2名の計3名に参加して頂いている。

演習の流れについては、表1のように、ミニ講義と、グループ演習として、受講生は2グループに分かれて、模擬妊産婦に対して妊婦健診の問診、問診票を使った3歳児健診、通訳者を介した問診を行う。また、外国人女性の出産経験を聞くという内容も盛り込んでいる。



写真1. 演習の様子：グループに分かれて模擬妊産婦に問診



写真2. 演習の様子：通訳者を介しての問診

妊婦健診の問診では、ゲストの模擬妊産婦には日本語が話せない役を演じていただき、受講生は表2の項目に沿って問診を行っていく。問診後には、ゲストからの感想を伺い、また、問診の答え合わせと、どのように話すかといった「やさしい日本語」について通訳者から説明を受ける。

演習の時期としては、前期(春季学期)7週間と、後期(秋季学期)7週間の助産学実習の合間となる10月ごろに行っている。つまり受講生たちはすでに7週間の助産学実習を終えており、レディネスとしても臨床での助産実践をイメージできる状況である。

Ⅲ. 評価方法

1. 対象：A大学の助産学生で科目の受講生42名。
2. 方法：データ収集期間は2013年から2015年の4年間とした。授業の「振り返りシート」を受講生全員に配布し、授業終了後に回収を求めた。シートの内容は「これまでの外国人患者さんとの対応」と、受講した演習の感想や気づきを記載するよう求めた。分析として、回収した振り返りシートの記述内容を類似性に基づき分類し、分析した。

表3 妊婦健診の問診での気づき

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|--------------------|----------------------------|
| 相手に安心感を与える対応 | ゆっくり話し分かりたいと思うこと |
| | 笑顔で安心感を与える |
| | 緊張を解き安心するように関わる |
| | 構えず同じ心を持った人として接する |
| | こちらの対応次第で相手をもっと不安にさせる |
| 相手の文化や生活背景を知って説明する | 相手の国での出産方法などがわからない |
| | 食事についてはものも考え方も異なるので進め方が難しい |
| | 同じ言葉でも文化や制度が違う |
| 伝わる説明の仕方が難しい | どう説明したら伝わるのか難しい |
| | 日本語で簡単に説明することの難しさ |
| | 英語圏でない英語は難しい |
| | 聞き方を工夫しないと回答がずれる |
| 伝え方の工夫で通じ合う | 優しい日本語で話すこと通じる |
| | 図や数字を書くことで通じ合った |
| | 実際のものを見ると確実である |
| | 同じものを見ながら会話する |
| 通じなくてもあきらめない | 言葉が通じなくてもあきらめずに伝えること |

3. 倫理的配慮：受講生全員に「振り返りシート」を授業評価に用いる旨と、プライバシーの保護を説明し、授業評価への参加は自由意志によるもので、同意の有無と成績評価には全く関係のないことを保証するものであることを口頭で説明した。授業評価への参加の諾否については、参加の意思がある学生には「振り返りシート」の学生氏名の横に丸印を記載してもらおうよう求めた。

IV. 結果

受講生42名中、授業評価への参加協力の同意を得られた30名（71%）を対象とした。

1. 外国人患者へのケアの経験

これまでに看護や助産の実習で外国人ケアの経験があるとした受講生は16名（53%）であった。このうち、助産学実習で外国人妊産婦のケアに関わった受講生は11名（69%）で、そのうち分娩介助を行った受講生は2名であった。

経験内容として、ほとんどの受講生が、コミュニケーションの難しさや、不安に怯える妊産婦に戸惑う、伝わらない悔しい経験であったとしている。

2. 外国人模擬妊産婦の演習での気づき

日本語能力が十分でない模擬妊産婦を対象に妊婦健診での問診をそれぞれグループで実施した。ここでの受講生の気づきとして、5つのカテゴリーと17のサブカテゴリーに整理された。以下、カテゴリーを【】、サブ

カテゴリーを〈〉、サブカテゴリーを導いた記述内容を「」で示す。

表3に示すように、【相手に安心感を与える対応】、【相手の文化や生活背景を知って説明する】、【伝わる説明の仕方が難しい】、【伝え方の工夫で通じ合う】、【通じなくてもあきらめない】が抽出された。

【相手に安心感を与える対応】は〈ゆっくり話し分かりたいと思うこと〉、〈笑顔で安心感を与える〉、〈構えず同じ心を持った人として接する〉などで構成された。記述では「わかってもらえなくて困った顔をしたら相手は悲しくなるだろう」や「質問攻めではなく、笑顔であなたを受け入れているという姿勢を持つことが大切」などがあつた。

【相手の文化や生活背景を知って説明する】では、〈食事についてはものも考え方も異なるので進め方が難しい〉、〈同じ言葉でも文化や制度が違う〉などが挙げられた。記載内容では「母乳やミルクの考え方、離乳食の内容など国によって違うので、食べ物の進め方も難しい」、「問診票があつても、文化や制度が違うので安心せずしっかり説明する必要がある」があつた。

【伝わる説明の仕方が難しい】では、〈どう説明したら伝わるのか難しい〉、〈日本語で簡単に説明することの難しさ〉などで構成された。記載内容では、「先天性代謝異常検査など、日本語でもわかりやすく説明できるようにしておかなければと思った」などがあつた。

【伝え方の工夫で通じ合う】では、〈優しい日本語で話すこと通じる〉、〈図や数字を書くことで通じ合った〉、

表4 通訳者を介した問診での気づき

| | |
|--------------------|-----------------------------|
| 安心してコミュニケーションできる | コミュニケーションが円滑になる |
| | 医療者も対象者も安心してコミュニケーションできる |
| | 意思疎通がしやすい |
| 正しく内容が伝わりあう | 深い内容の話し合いができる |
| | 保健指導も理解しやすい |
| 対象者の様子が変わる | とてもよく話す方だったんだとわかる |
| | 明るい表情をされ本来の姿だと思う |
| 通訳者がいてもいなくても対象者と話す | 対話する相手を意識して話す |
| | 対象者の目を見て会話すること |
| | 言いたいことは相手のほうを見て話す |
| | 対象者に伝えるという気持ちで話す |
| | 相手が外国語で話しているときも傾聴する姿勢 |
| 通訳者を見て話さないようにする | 通訳者のほうを見て話してしまう |
| | 通訳者と会話してしまうことに気が付く |
| 通訳者への配慮 | それぞれが座る配置を考えて話しやすい状況を作る |
| | 言葉をかみ砕きすぎて通訳者を混乱させた |
| | 医療に慣れていない通訳者もいるのでわかりやすく発言する |
| | 通訳者が話しやすいように部分で区切って話す |

〈同じものを見ながら会話する〉などが挙げられた。記載内容では「『帝王切開の希望』も『おなかを切って産みたいか』とかみ砕いて、手でお腹を切るようなジェスチャーを入れて話すと通じた」や「保険の種類は実際にモノを見せてもらうことで確実だった」などがあった。

【通じなくてもあきらめない】は〈言葉が通じなくてもあきらめずに伝えること〉の一つで構成された。記載内容では「言葉が通じなくても、あいさつや説明の内容は同じで丁寧にする必要がある」などがあった。

3. 通訳者を介しての演習での気づき

日常的に医療通訳もされているゲストに、問診の場面に通訳者として参加してもらう演習を行った。表4に示すように、ここでの学生の気づきとしては、【安心してコミュニケーションできる】、【正しく内容が伝わりあう】、【対象者の様子が変わる】、【通訳者がいてもいなくても対象者と話す】、【通訳者を見て話さないようにする】、【通訳者への配慮】の6つのカテゴリと、18のサブカテゴリが抽出された。

【安心してコミュニケーションできる】では、〈コミュニケーションが円滑になる〉、〈意思疎通がしやすい〉などが挙げられた。記載内容では「対象者にとっては気持ちを理解してもらえ人がそばにいると安心につながると思った」などがあった。

【正しく内容が伝わりあう】では、〈深い内容の話し合いができる〉、〈保健指導も理解しやすい〉が挙げられた。記載内容では、「せっかく言葉を伝えてくれる

人がいるからこそ、保健指導もお互いより理解しやすい」があった。

【対象者の様子が変わる】では、〈とてもよく話す方だったんだとわかる〉など、通訳者を介することで本来の妊産婦の様子を知ることとなる。

【通訳者がいてもいなくても対象者と話す】では、〈対話する相手を意識して話す〉、〈言いたいことは相手のほうを見て話す〉、〈対象者に伝えるという気持ちで話す〉などで構成された。記載内容では「大事なことは通訳者ではなく相手に伝えようと思うことだと感じた」や「言葉が通じなくても思いが伝わるように目を見て話すことを意識した」があった。

【通訳者を見て話さないようにする】では、〈通訳者と会話してしまうことに気が付く〉などが挙げられた。【通訳者への配慮】では、〈それぞれが座る配置を考えて話しやすい状況を作る〉、〈言葉をかみ砕きすぎて通訳者を混乱させた〉、〈医療に慣れていない通訳者もいるのでわかりやすく発言する〉、〈通訳者が話しやすいように部分で区切って話す〉で構成された。

4. 演習の感想

全体を通しての演習の感想では、【過度な配慮ではなくできることをする】、【相手の立場に立って安心させたい】、【臨床で実践することへの動機につながった】、【助産師としての態度を再認識した】、【自分の壁に気が付く】、【外国人妊産婦の背景や文化を知ることができた】の6つのカテゴリと18のサブカテゴリが抽出された。

表5 演習での学びや気づき

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|-----------------------|----------------------------|
| 過度な配慮ではなくできることをする | 外国人だと特別扱いするのではなくできることを配慮する |
| | 生活する日本で使う日本語で理解することも大切 |
| 相手の立場に立って安心させたい | 逃げないで笑顔で対応して不安を軽減したい |
| | 友好的でわかりやすい態度をとる |
| | 挨拶だけでも母語で行い安心してもらいたい |
| 臨床で実践することへの動機につながった | 外国人の多い就職先なので授業の学びを役立てたい |
| | 言葉の苦手意識から解放された |
| | 気持ちで接することで通じ合えることができそう |
| | コミュニケーションできるかもと感じた |
| 助産師としての態度を再認識した | 相手を一番に考えることは助産師としても同じ |
| | 理解されるという喜びと安心を与える助産師になりたい |
| | 不安な気持ちに寄り添える助産師になりたい |
| 自分の壁に気が付く | 言葉の壁だと思いこんだ自分の中で作った壁に気付いた |
| | 自分の固定観念を崩すこと |
| | 外国人にとらわれず背景を知ること |
| 外国人妊産婦の背景や文化を知ることができた | 外国のお産の様子が知れて良かった |
| | 日本に暮らす外国人の背景が複雑だと思った |
| | 日本に暮らすには事情があることを知った |

【過度な配慮ではなくできることをする】では、〈外国人だと特別扱いするのではなくできることを配慮する〉、〈生活する日本で使う日本語で理解することも大切〉で構成された。記載内容では「これから日本で生活されて行政サービスを利用されるだろうから日本語できちんと説明して理解をすることも必要」などがあつた。また、「外国人の方だからと特別扱いして身構えるのではなく、同じ妊婦としてその人のために何ができるのかを考える」という記述もあつた。

【相手の立場に立って安心させたい】では、〈逃げないで笑顔で対応して不安を軽減したい〉、〈挨拶だけでも母語で行い安心してもらいたい〉などで構成された。記述では、「リラックスできる雰囲気作りが関わるうえで重要」、「温かい雰囲気やケアはそれだけで相手に伝わる」などがあつた。

【臨床で実践することへの動機につながった】では、〈外国人の多い就職先なので授業の学びを役立てたい〉、〈言葉の苦手意識から解放された〉、〈気持ちで接することで通じ合えることができそう〉などで構成された。「英語は苦手だったけれど、通じ合うことや伝える方法がわかった」などがあつた。

【助産師としての態度を再認識した】では、〈相手を一番に考えることは助産師としても同じ〉、〈理解されるという喜びと安心を与える助産師になりたい〉、〈不安な気持ちに寄り添える助産師になりたい〉で構成された。「実習でも妊産婦を主語に考えることを身に着

けるよう努力しているので、助産師の態度と同じだと思った」などの記述があつた。

【自分の壁に気が付く】では、〈言葉の壁だと思いこんだ自分の中で作った壁に気付いた〉、〈自分の固定観念を崩すこと〉などで構成された。

【外国人妊産婦の背景や文化を知ることができた】では、〈外国のお産の様子が知れて良かった〉、〈日本に暮らす外国人の背景が複雑だと思った〉などがあつた。

V. 考察

1. 演習の目標に沿った評価

受講生のおよそ半数がこれまでに外国人に実習で関わっており、またその7割近くが助産学実習で関わっていたことからこの演習の意義を再認識することができた。

受講生の演習での実際の様子や感想の結果をもとに、演習の評価について、本演習の目標に基づいて記述する。

「目標1のコミュニケーションの種類、方法について工夫することの必要性を理解できる」では、まず、演習を通じて受講生はコミュニケーションの多様性について学んでいたことがわかる。振り返りシートの結果からも、ジェスチャーやイラストや実物など非言語的なものの重要性、互いの表情を鏡像とらえうるこ

と、言葉が通じない場面では態度が重要であり、雰囲気は更に重要であることに気付いていた。

そして、「相手の背景や携行しているものから考える」という点ではパラフレーズする（言い換える）こと、相手の言葉から類推することで相手の理解がより期待できること、制度・習慣によっては妊産婦の母国にないものであることを把握するなど、文化的社会的な配慮が必要だということに気付いていた。コミュニケーションの工夫では、伝える／伝わるという意識をもつことや、笑顔を見せること、ゆっくり話すことの重要性を認識するようになった。そして自分の中にあった「通じない」という固定観念や「あたりまえ」に気づくことができていた。

次に、「目標2の通訳を用いたコミュニケーションについて学ぶことができる」について演習の評価を見ていく。医療の現場では、外国人の受診や入院の増加からますます医療通訳の必要性が指摘されている。しかし、その一方で日本人は日常的に通訳を介して会話することはほとんどなく、医療の教育や現場でも通訳を介して会話することに不慣れであり、教育での取り組みも報告されつつある（村松2014）。今回の演習では通訳者を介して会話することの演習を行い、その効果について「安心できる」「正しく伝わる」「相手の様子が変わる」などというように受講生たちは自身の実感を通して学んでいた。そして、「通訳者への配慮」という視点が、対象者への配慮へつながるのだという視線がうかがえる。また、通訳のあるなしに関わらず「対象者と話す」という姿勢や意識が最も重要だという本質的なケア提供者の気づきが見られた。

2. 演習の評価

ここでは、演習全般について評価をまとめる。まず、演習の時期を評価すれば、すでに助産実習を経験し、就職する自分もイメージできるこの時期に行うことで、よりリアルな経験となったようである。本演習は日本語や言葉のもつ意味の理解、パラフレーズの仕方、態度や表情といった自らのコミュニケーションスキルについて再考するとともに、非言語コミュニケーションの重要性についても意識する機会となっていた。

また、通訳を使う際の利点を実感しつつも、妊産婦を中心として通訳を用いることの重要性を認識していた。

今回の演習は、「相手に伝えること」「相手を理解すること」、助産ケアにおいて「大切にされる関わり」

といった助産ケアの実践を行う上で重要となるコミュニケーションのあり方について改めて認識する機会となっていた。

小林（2002,p89）が「外国人にやさしいということ、すなわち患者全体にやさしいということであり、患者にやさしい医療機関を目指せば、その精神は自然に外国人患者にやさしい医療機関にたどり着くはずである」と指摘するように、マイノリティに注目するという視点に立つことが、ケア全体、関わり全体を見直すきっかけにもなり得るのである。この演習においても、受講生は外国人妊産婦だけではなく、日本人妊産婦への対応にも応用して考察をめぐらす機会となったようである。また、助産師としての女性中心で考えるという態度が外国人妊産婦へ関わりにも活かせることを再認識していた。

以上のことから、この演習が助産師の文化的能力の育成や、国際的視野を育成するための早期体験（early expose）としても効果をもたらしていたと評価できる。「国際的視野」を培うことを目標にすると、海外での演習に目が向きがちであるが、国内においても、この演習のように、より身近に助産師が外国人妊産婦にケア実践する場を得ることができ、「国際的視野」を思考する場があるといえる。

VI. 結論にかえて

「助産とコミュニティ」の科目での外国人模擬妊産婦とのコミュニケーション演習では、コミュニケーションの種類、方法について工夫することの必要性を理解できるだけでなく、相手に安心感を与えるといった姿勢や態度に気付いていた。また、通訳者を介した演習では、その意思疎通における効果とともに、通訳者への配慮についても気づきが促されていた。全体として、自らの助産観の再認識や、実践につながるエンパワーが示唆される演習となった。

助産師教育における1年間の教育課程のなかで、臨床や自分が働く場での助産実践をイメージできる時期に授業を行うことの有効性も示唆された。本学は助産専攻科から、大学院での助産教育課程へと移行するが、演習の組み立て方については、今後もさらに試行と検討を繰り返し、より実践的な演習として、助産師の基本的な必須能力の獲得につなげたい。

謝辞

本授業評価にご協力いただきました学生の皆様、演習を共に企画して下さったMEDINT（医療通訳研究会）の村松紀子様、ゲスト模擬妊産婦として協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。本資料の一部は、日本助産学会第27回学術集会（金沢市）において発表しました。

引用文献

- 法務省入管管理局（2016）平成26年末現在における在留外国人数について（確定値），http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00050.html（2016年9月15日閲覧）
- ICM（2010）国際助産師連盟 基本的助産実践に必須なコンピテンシー2010年改訂2013年，<http://www.nurse.or.jp/nursing/international/icm/basic/standard/pdf/kj-12.pdf>（2016年9月15日閲覧）
- 井上千尋（2006）日本語によるコミュニケーションが困難な外国人妊産婦の周産期医療上の問題点と支援に関する研究——医療機関における12年間の分娩事例の分析より——，国際保健医療21（1），p25-32.
- 小林米幸（2002）外国人患者診療・看護ガイド，エルゼピア・ジャパン
- 村松紀子（2014）日本で経験する医療文化の違いをレポートする，国際看護学，南裕子編，中山書店
- 李節子（2015）医療通訳と保健医療福祉，杏林書院

（受付：2016.9.28：受理：2016.12.20）

